

1

名古屋
(中 村)

柳
小 学 校

ヒロタ モトコ
廣 田 元 子

分科会番号 2 0

分科会名 総 合

研究題目 防災教育を通じたICT国際交流

- 教師の意識が変われば、子どもが変わる・・・ -

1. はじめに

教師の意識が変われば、子どもが変わる。子どもが変われば、親が変わる。親が変われば、学校が変わる。学校が変われば、学校に対する国の受入が変わる。学校に対する国の受入が変われば、地球ネットワーク環境が変わる。地球ネットワーク環境が変われば、リアルタイムで、子どもたちが、地球に住む人や、国の願いを感じるようになり、いつか自然破壊阻止の大きなアクションを起こす。これにより、少なくとも人災による被害は多少減る可能性がある。

本校は、この流れを少しずつ感じながら、「防災世界子ども会議」プロジェクト学習を実践して3年目を迎えている。

2. 研究の実践とその変容

(1) 教師の意識が変われば、子どもが変わる

「防災世界子ども会議」プロジェクト学習とは

「防災世界子ども会議」プロジェクト学習とは、*1プロジェクト学習 (Project-Based Learning:PBL) を、世界の小中高等学校と共同で、「防災世界子ども会議」を達成するために計画を立てたり、考えたりする過程で、新しい知識や技術を身につけていく学習手法である。本校では、*2地球ネットワークへの入り口として、NPO法人の国際教育ネットワーク*3JEARN(ジェイアーン)を選び、*4iEARN(アイアーン)のネットワークを使って世界との*5ICT国際交流学習を進めている。

*1 プロジェクト学習：とは、「研究や開発の計画、企画（三省堂新語辞典）」を指し、明確な目的や目標を持つ。

*2 地球ネットワーク：インターネットWeb&リアルタイムで人と、人とが交流する場

*3 JEARN(ジェイアーン)：iEARN 国際教育ネットワークの日本の窓口（事務局）

*4 iEARN(アイアーン)：世界約110カ国、2万校、約100万人の子どもたちからなるNPO（非営利事業組織）国際教育ネットワークである。

*5 ICT (Information and Communication Technologyの略) 情報コミュニケーション技術

教師の防災への意識が変わった

2004年4月当初、本校ではすでに、各学年の「総合的な学習」のカリキュラムは立てられていた。その中に、「防災」に関する取り組みはなかった。当然、「防災世界子ども会議」プロジェクト学習を、4月の段階で組み込む余地はなかった。

しかし、「東海大地震がもうすぐ来るかもしれない」の危機感は各担任の心の内にはあった。

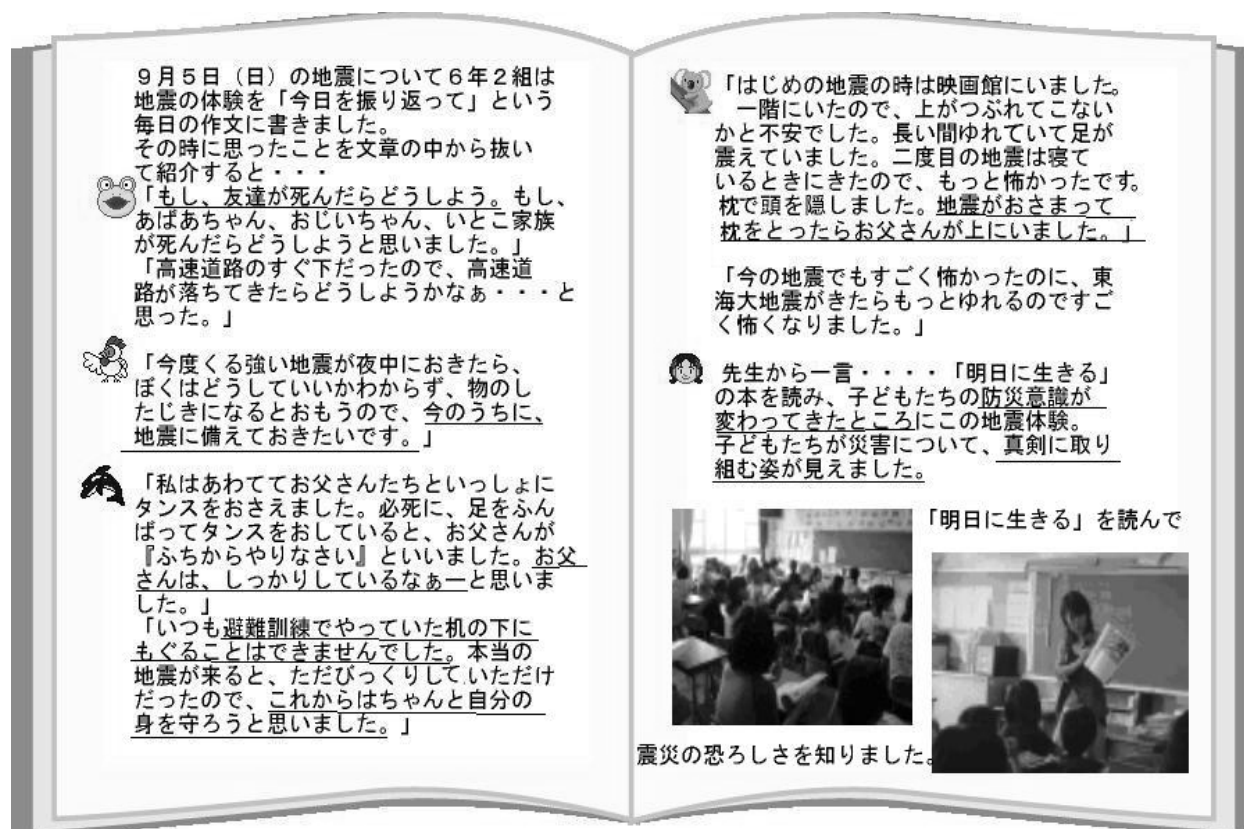
2004年9月1日防災の日。「阪神・淡路大震災10周年記念事業 - 大震災の教訓を生かして、世界の国々の子どもたちが、自然と対座し、「共生」の心を大切に、力強く21世紀を生きていくための防災について話し合うプロジェクト - 」に、個人的に賛同し、ボランティアのつもりで参加していた教師を介して、5・6年生が全員参加で「総合的な学習」や、各教科で取り組みを始めた。

子どもの防災への意識が変わった

高学年が同時に開始した防災プロジェクトは、ホームページで世界に発信された。

兵庫県から、資料や人的派遣を受け、各担任が授業実践を始めた結果、子どもたちの防災意識が変わった。(2004年9月)

<2005年9月6日(月)の地震の後の防災授業とその時の感想>



(2) 子どもが変われば、親が変わる

子どもの防災対策への変容

子どもたちは、ICTを使って、世界中の子どもたちと協働で防災学習をしようと努力した。また、*6英語フォーラムへの書き込みや、*7防災キャラクターと質問ノートの郵便交流にも積極的に活動した。

*6 英語フォーラム：アイアンのインターネット掲示板で、直接書き込みができ、世界の交流校と掲示板を通して交流することができる。共通語は英語で、子どもたちは、無料の翻訳ソフトを使って読んだり、書いたりする。

*7 防災キャラクター：交流校が、自分の学校のイメージキャラクターを決め、小さなぬいぐるみ防災大使として、防災に関する質問ノートを持って、国際郵便(<EMS>EMSを使うとインターネットで郵便物の追跡ができる)を使って異文化交流をする。

< 2005年10月4日(月)のICTで国際交流活動の感想 >

今日、コンピュータで国際交流をやり
ました。私はフランスについて調べまし
た。メールには地震のことや、勉強して
いることについてなど書きました。早くみ
んなによんでもらって、10カ国すべての
人にお返事をいただけるとうれしいなあ
ーと思います。外国の人とはあまり親し
むきかいはないので、今日はとても楽し
かったです。こうやって他の国のことを
知ったり、ぎゃくに私たちが日本のこと
を他の国に教えあって仲良くなれるとい
いです。いつ返事が返ってくるかわから
ないけれど、絶対0(ゼロ)はいやです。
たくさん質問したので、全部返ってくれ
るとうれしいです。またやりたいです。



無料の翻訳ソフトを使って
アイアーンフォーラムに書
き込みました。

(メールを送るのか。きんちょうするな
あー何を書こう) 国際交流でメールを送
りました。コメントで地震についてどんな
ことをかこう??と悩んでいました。書
き出しはこんにちは、始めまして・・・と打
ちました。それから何度も間違えました
が、何とかできました。ちゃんと返事がく
るといいな。

今日3時間目にコンピュータで国際交
流をやった。(外国の人に手紙なんて初
めてだ)と思いながらドキドキしてコメン
トを書いていた。コメントができ、先生に
やり方を聞き、掲示板にのせた。「すげ
えー」思った。外国の人はこのコメント
を読んで返事をくれたらいいなと思った。



「すげえー！」

< 2005年11月4日(木) 阪神・淡路大震災体験を聞き、炊き出し実習をする子どもたち >

岡本さんの話を聞いて炊き出しが「心の
ケア」につながることを学びました。



ジェイアーンの岡本さん



舞台の上で炊き出しおにぎり実演

炊き出しの方法や調理の仕方を掲示
できるように用意しています。



炊き出し実習の様子



なべでうまくとけるかなあー

<被災地へ「私たちにできることは何か？」の活動に各学級が取り組んだ。>

児童会の活動では
スマトラ沖地震の募金をしました。



5年生はゲームを作って贈りました。



6年生は「ピーナツベア基金」
立ち上げました。



インターネットで日本の歌を贈りました。



さくら さくらを録音している

親の防災意識が変わった

防災への取り組みを進めるにつれ、各家庭の協力も強まり、「我が家の防災家族会議」へのお願いにも、すぐに答えてくれた。子どもたちは、家族会議の結果をポスターにして発表した。また、防災には大変協力的な親の支援で、2005年3月28日(月)「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」には家族総出で、自費参加し、ポスターセッション、柳小学校の防災プロジェクト発表と国際交流をした。

防災世界子ども会議2005inひょうご



ユニセフと共同で「あったかい場所」づくり



JICAで子ども防災会議

夢舞台国際会議場で



宣言発表会

(3) 親が変われば、学校が変わる

親の防災対策への変容

柳小学校の一部有志が「防災マップ」を作り始めた。(2004年6月～)

学校の「防災世界子ども会議」プロジェクト学習参加への体制が変わった

総合学習として、3年から6年までの防災についての学習を、年間計画に位置づけ、一人の指導者が各学年に応じて、計画的に指導することになった。

(4) 学校が変われば、学校に対する国の受入が変わる

学校の「防災世界子ども会議」プロジェクト学習参加

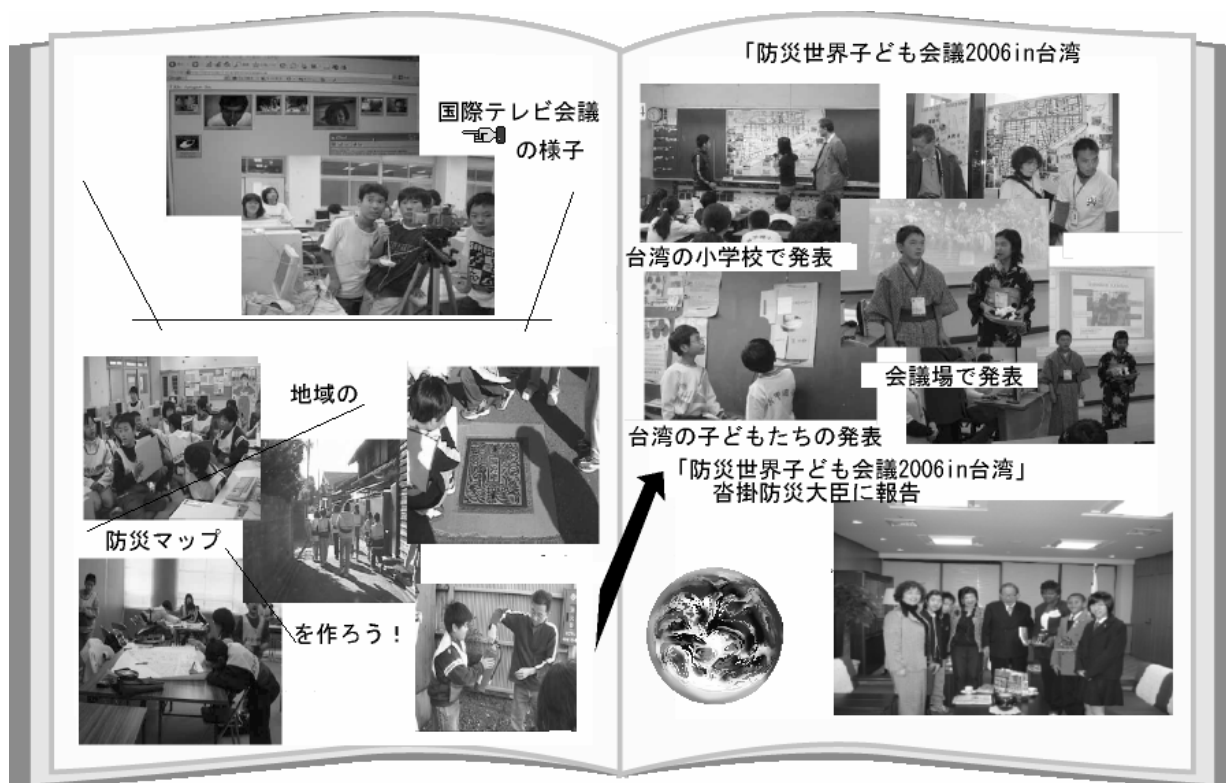
「愛・地球博」で「防災世界子ども会議」プロジェクト学習の発表を、柳小学校として、舞台と2枚のパネル展示で発表をした。

アイアーン国際会議に、子どもたちがテレビ会議で参加し、防災について、世界の先生方と話し合った。

「防災世界子ども会議」への学校に対する国の受入が変わった

台湾政府は「防災世界子ども会議」を援助した。その結果、2006年の「防災世界子ども会議」は台湾で2006年1月に開催された。

2006年1月13日柳小学校の子どもたちが、沓掛防災大臣を表敬訪問し、「防災世界子ども会議」の報告を大臣室で行った。



(5) 学校に対する国の受入が変われば、地球ネットワーク環境が変わる。

「防災世界子ども会議」への学校に対する国の受入の変容

防災100校に本校が選定された。

「防災マップコンクール」を「防災世界子ども会議」実行委員会が、海外広報活動担当として海外の小学校を束ねることになった。

地球ネットワーク環境が変わった

2005年8月、パリのユネスコ本部で、2006年「防災世界子ども会議 2006in 台湾」の報告を、本校の教師と、ジェイアンの海外担当理事が国連のユネスコ本部防災担当者に報告。今後の「防災世界子ども会議」に協力をお願いした。

(6) 地球ネットワーク環境が変われば、少なくとも人災から来る災害が減る

地球ネットワーク環境の変容

国連ユネスコ本部防災局が「防災世界子ども会議」を正式に受け入れ、世界に広く防災ネットワークができるように共同でプロジェクトを進める約束をした。

2006年8月28日(月)ユネスコは柳小学校の子どもたち2名をスイスの「ダボス国連防災会議 2006」にユネスコの特別ゲストとして招待し、各国の防災大臣の前で、「防災世界子ども会議」の発表をさせた。

地球に住む人や、国の願いを感じるような子どもたちが育つことを願う

国連防災会議の質疑応答の中で、「私たち大人は、大人たちの世界で防災について考えていこうとしている。もっと、子どもたちの声を聞いていかなければならない。」という意見が、各国の代表の方からあった。



3. おわりに

たった一人の教師の意識が変わっただけで、世界で通用するような子どもに変わる。子どもが変われば、親が今まで知らない世界を知る。親が変われば、学校もその後押しができる。学校が変われば、学校に対して国が支援をしてくれる。学校に対する国の受入が変われば、地球ネットワーク環境を通して、地球で起こっている自然災害や、人災が身近に感じるようになる。地球ネットワーク環境で子どもたちの顔を見れば、声を聞けば、子どもたちの叫びがわかる。どこにいても、地球に住む人や、国の願いを感じるようになる。いつのことになるかわからないが、「防災世界子ども会議」プロジェクト学習を続けることによって、一握りの活動でも、子どもたちの中から、自然破壊阻止の大きなアクションを起こす人物が出てくるのを期待している。